

史遊会通信

No.236 号
平成 26 年
11 月 10 日

編 集
042-754-9360
arai-hiroshi@
jcom.home.ne.jp
新 井 宏

十月講演要旨

古代日本海沿岸の神々と 国宝『海部氏系図』

諸 橋 奏

一 縄文のカミ

日本民族(言語・文化・宗教・人種)が形成されたのは、列島周辺を流れる潮流の賜物といつても過言ではない。

ベーリング海に発して南下する「親潮(千島海流)」や「東カラフト寒流」。南のフィリピン諸島から北上する太平洋最大の潮流「黒潮(日本海流)」。

日本海側では、日本海北隅に発する「リマン海流」、それに続く「沿海州寒流・北鮮寒流」。黒潮支流の「対馬海流」、「東鮮暖流」。

対馬暖流は更に「津軽暖流」、「宗谷暖流」に分岐した後、カラフト西岸に達する。

古代の小舟では大河の如き潮流の流れのままの人類であった。そんな古代の長い時間をかけて形成された民族の言語「日本語」は大

マライ・ポリネシア語族、西方系のドラヴィダ語(タミル語)族などそれぞれのかかわりが云々される類をみない独自の言語となった。

そして「信仰」もまたである。「惟神(かむながらの道)」である。「自然に対する独自の感受性をもとに目に見えないカミの働きへの崇拝を育てた、素朴な儀礼に基づく民族宗教」で「自然はカミ」であった。古代の自然崇拝を今日に継承している「磐座・磐境・磯城・神奈備・神籬・禁足地」などに、自然の中に神をみて、これを祀った精神風土、日本文化の源流を知ることができる。

二 弥生の神々

紀元前四百年頃、数千年の文明をもつ中国は、春秋・戦国時代にあり、国々の興亡が繰

例 会 の お 知 ら せ

◎ 十一月例会

日 時 十一月二十六日(水)

午後六時十分～八時

会 場 千代田区立日比谷図書文化館

四階セミナールーム

討論会 日本列島 西・東

司会 鯨 游海氏

十二月号自由執筆「今年感動した本」

全員(友の会員も含む)

字 数 20字 75行を目安に

締 切 十一月三十日

◎ 十二月忘年会

日 時 平成二十六年十二月十日(水)

午後六時～八時

会 場 学士会館

会 費 三千円

出欠のご返事は十一月末まで

り広げられていた。春秋時代の前四七三年には呉が滅亡し、戦国時代半ばの前三三四年に粵(越)が滅亡する。越は中国東南部に広く分布した南方系少数民族から出た水田稲作のかかわりの深い民族であった。隣国呉を滅ぼし、会稽・琅琊に都し、浙江・江蘇・山東に覇を唱えたが楚に滅ぼされた。

この頃に江南の水田稲作(ジャポニカ米)と鉄器文化をもった人々が、山東半島・朝鮮半島・南部九州に渡来したと思われる。

しかしその頃の朝鮮半島は北方騎馬民族の南下の最中で多民族割拠の時代であった。古代朝鮮半島に伝播した稲作、鉄器の文化が本格的に日本とかかわってくるのは古代朝鮮の南半部の多民族が三国に収斂されてきた前二〇〇年頃の原三韓の時代になってからである。

そしてこの文化は生産の神を伴って渡来してきた。日本海沿岸は自然の縄文から生産の弥生時代へと一変する。

石見と出雲の国境にある佐(狭)比売山(三瓶山)にまつわる大宜都比売神と娘の乙子狭姫の穀物発生の伝説や丹波国の伊去奈子嶽(磯砂山)に天降った豊受大神(のちの外宮祭神)の水田稲作についての丹波国伝承「あなにえし田庭(タニハ)が転じてタンバ＝丹波に」などに、朝鮮半島南部から日本海沿岸に生産神を奉じた集団が渡来した原初の姿が見える。

「豊受(トヨウケ)大神」「大宜都(オオゲツ)比売神」の「ケ・ゲ」は「食」の意味で食は稲であり、稲の精霊の「稲魂」が神様。「宇迦之御魂神、倉稻魂(うかのみたま)、物忌神、宇賀神、御食津神、御饌津神、保食(うけもち)神、氣比神」更には「稻荷(稲生る)、田の神」など全て同義語。日本人にとつていかに「稲」は特別なモノであるかが解る。

「古代日本の神々」の「表」にみる如く神々の中心は素戔鳴尊と火明命(饒速日命)であるが、その諡号は「神祖熊野大神櫛御氣野命」「天照国照彦火明櫛甕玉饒速日命」。櫛御氣野命は「奇御食主命」、「饒速」は「豊穰」とともに食・穀物・稲をつかさどる神に通ずる。

ところで、諡号のない神は生体が感じられない。例えば大国主命。

「記紀」の編纂に当り、持統女帝(六八六～六九六年在位)は「中央集権国家の確立と天皇家の由緒正統化のため」に不都合な大神神社・石上神社の古文書と春日氏・大伴氏など一六豪族の系図とを六九一年に没収、抹消してしまっている。同時に作成した神話は、部族の最高神素戔鳴尊とその子火明命(饒速日命)を抹殺、代って出雲神話の最高神として大己貴(おおなむち)神を登場させた。かかる強行策にも拘らず饒速日は「記」に一カ所、「紀」では三カ所にエピソードが記されている。

る。当時、饒速日がかつて原大和の支配者であったことは周知のことだったことが判る。

出雲大社の社名は明治以降の正式社名で、以前は杵築大社。丹波国一宮(亀岡市)出雲大神宮(おおかみのみや)の小引きでは、明治になり神社制度に定められた祭神が大国主命、三穗津姫命(「表」参照)。『丹波国風土記』には「和同年中(七〇八～七一五年)出雲国杵築に大国主神(またの名、大己貴命、御蔭大神、三穗津彦大神其の他)を遷す。出雲大社は是れ也」によるものという。尚、大神宮社殿内「空ノ間」にはかつては国常立命が祀ってあったとのこと、大八洲国祖神社の社名、俗称の元出雲と併せ、大神宮が古代では格別の社だったことが窺える。

また、天平五年(七三三)出雲国造広嶋撰録『出雲国風土記』では朝廷創作「記紀」に従い出雲国最高神「所造天下大穴持命」で多数ある大国主命の名を統一している。

これらのことは「記紀」が勝者の歴史書であり、牽強付会(こじつけ)の書である一端を示している。

三 国宝『海部氏系図』の紹介

古代日本海沿岸の神社やクニを潟湖連合として纏め、その中心にあったのが、丹後一宮籠神社・海部氏であった。

籠神社は天の橋立の聖地にあり、海部氏は現在第八十二代の歴史をもつ。主祭神は丹後海部氏始祖彦火明命。境内には彦火火出見命・倭宿禰命が、奥宮真名井神社(古名、吉佐宮)には豊受大神(外宮)・天照大神(内宮)が祭られている。元伊勢と称される所以。

籠神社には、昭和五十年にはじめて公開され、翌五十一年には国宝に指定された日本最古の系図『海部氏系図』と附(つ)けたり『海部氏勘注系図』がある。

当系図は平安初期に書かれて以来、昭和五十年まで約千百年以上秘匿が守られてきた。しかも史的資料として第一級品と認められている。

第一級資料の認定については

一 十六世代の人名には丹後国庁公認の「丹後国印」が押印されている。

二 成立年代が八七一年から八七七年と特定できる。

三 繫系図の古態で、海部家を継ぐ一子のみ記す父子相続の形態。続柄として「孫」「児」「弟」を使用。

四 人名に「命」「宿禰」「直」「祝」がついており、夫々の時代の身分などが判る。

五 附(つ)けたり『海部氏勘注系図』は江戸初期のものというが、内容は平安期にさかのぼるもので史料価値が高い。

など。

その内容については

一 丹後海部氏の始祖ヒコホアカリノミコトは祖神において天皇家とは兄弟(ニニギノミコト)。

二 ヒコホアカリは丹後に降臨した(一説によれば若狭湾の冠島＝大島)。

三 四代目のヤマトスクネノミコトは大和の建国に関与。

四 古代海人族は技術集団で水軍でもあり、拠点は丹後にあった。

更に「海部氏系図」と「海部氏勘注系図」を総合検討して判ることとして

① 始祖彦火明命は前二世紀末頃の人。

② 二代天香語山命、三代天村雲命、四代倭宿禰命は前一世紀頃の人。

③ 九世孫意富那比命の妹日女命はヒミコか？

④ 十一世孫小登與命の妹日女命はトヨか？

⑤ 十四世孫川上眞稚命(大縣主になる)は丹波道主命か？

⑥ 十五世孫丹波大矢田彦の妹川上日女命はヒバシヒメ(垂仁天皇のサホヒメの後の后)か？

⑦ 「二六六年倭の女王西晋に朝貢する」(「四一三年倭王讃、東晋に遣使」まで中国の歴史書から倭の関係記事が絶えるが、この頃強大になってきた大和の天皇勢力は既

存の丹後国勢力制圧を図る。軍勢力としての四道將軍派遣(丹波道主命説話)。結婚政策(日葉酢媛伝承、天皇のもとに召された丹波国の神の娘たち)。懷柔策(天皇、海部の姓を賜う)。祭神政策(天照大神の丹波移し、丹波の「保食神(豊受大神)」の伊勢移し)。とどめは七一三年(和銅六)の丹後国分国。これらの事柄記録(系図)は中国の歴史書に空白の日本史(崇神天皇～応神天皇の一四七年間)を埋め重要。

以上「古代日本海の神々と海部氏系図」を俯瞰していると『魏志倭人伝』の「不弥国より水行二十日」は但馬の円山川河口の函石浜であり、「投馬国より水行十日陸行一月」は丹後半島を廻り若狭湾に入り宮津港に上陸。由良川を遡って(地理上は南東)福知山、綾部、和地、丹波高地・丹波、園部、亀岡(出雲大神宮所在地)、保津川、京都、奈良、天理、桜井が浮かんでくる。空想であろうか、『海部氏系図』の精査、謎解きが望まれる。

引用 『古代丹後国は、あった

参考文献 秘宝『海部氏系図』より探る』

伴とし子著 東京経済

“丹後王国”を証す

籠神社『海部氏系図』

伴とも子記

諸 橋 奏 平成26年10月22日

弥生以降の由緒、古社の神々の変遷など……………
縄文の頃より、鳥海山(2237メートル)に宿る古代神(山霊)に蝦夷を攻める鉄剣軍団が逆に征夷の神(654)に取り込んだ。内宮「みあれ」。外宮 物忌神(穀霊神・農耕神)
度津(朝鮮語の「海」パタ)神の神社、古代大陸や朝鮮半島から渡来、漂着があったと舒明紀・聖武紀に。対馬・和多津(ワツ)神社、隠岐島・由良比女神社(和多須(ワタス)潮流が分る
弥彦山(638メートル)は越中と越後の国境であったが、大宝2年(702)現在の如くに。中世には祭神は開拓神彌彦大明神のみであったが、江戸初期『大日本一宮記』に「伊夜日古社饒速日尊皇子天香山命」
太古、出雲～因幡の気多崎經由能登に渡ったので、気多社名に。分祀で但馬・越前・加賀・越中・越後(居多)・飛騨にも祀られる程神威があった。奥宮は素戔鳴尊を祀る。(本来の姿)
「白」は「しろ・はく」ではなく「しら」で御由緒など全て「しら・シラ」の振り仮名がつく。古代朝鮮の斯羅(新羅)、甌山(シラボン)と無縁でなく、斯羅渡来人の「故郷の神山」
謎多きこと籠神社に次ぐ。元越の国一宮とも。気比＝筥飯は食・饒・受・飯米・稲(生)・保食に係わる社名・祭神は意富加羅(オオカラ)国(任那)の王子都怒我阿羅斯等とも、淳湖神社の代表
敦賀をはじめ若狭・遠敷郡丹生郷・海神・白山など北陸道は中国・朝鮮の文化が色濃く伝わっている。若狭神＝彦神(山幸彦)と姫神(豊玉姫)夫婦で山神・海神の性を
名勝保津川は三穂津姫の名からで千年川と。当宮小引きによれば「崇神時に再興された」と『丹波風土記』和銅年中出雲国杵築に大国主命を遷す。出雲大社は是れ也」と。俗称元出雲
天火明命は若狭湾の凡海島(冠島・大島)に降臨し、丹波の真名井神社の豊受大神を(匏宮)。豊受大神は奈子嶽(磯砂山)に降臨。五穀を植え、その稔りを「あなにえし田庭」
天日槍命は新羅の王の子で垂仁天皇三年(320年頃)「八種の神宝」を持って渡来した。伝承は朝鮮伝来の刀剣等文化の人格化で、太陽神を祀り、矛・剣を神の依代の宗教・農耕鍛冶集団
宿禰(スネ)～村主(スグリ)は古朝鮮語で村長。姓の一。渡来系氏が称。村(スキ)は古朝鮮語(注、白村江(グ)スク(琉球語の城)。磯城(シキ)瑞籬宮跡、同系語
しどり(しとり・しずり)はシヅオリ(倭文織＝緯を青・赤などで染め乱れ模様に、あやぬの(古代の織物)当地開拓が倭文部一族によって進められたことによる。下照姫が居住
古来、種々の称号で呼ばれたが、明治以後、正式社名を出雲大社とした。大神の別称。大己貴神・大穴持命・大物主命・葦原醜男神・八千矛神・所造天大神・大国魂神・櫛甕魂神
古代語「くまの」は韓語。出雲族の神祖奇御食主。日本火出初社とも。出雲大社宮司就任式の火継式は当社で行われ、鑽火祭に出雲大社祭祀に用いる神火は大社宮司参拝の上拝受。
「うまし」は褒め言葉。「まじ」はまじない、占い、「ツツミタマ・十種神宝」を奉齊し、御魂鎮めを。物部氏の始祖で、祭事・神前裁判を司り、後に武力も「もののふ、武士の意」

古代日本海沿岸の神々と 国宝「海部氏系図」

	旧国名・所在地	神社名・祭神名	スサノオ・ニギハヤヒ関係	縄文時代の神
みち のく	出羽・山形県	大物忌神社	スサノオ・稲田姫の子	御神体山
	飽海郡遊佐町	大物忌神(倉稲魂神)	ニギハヤヒの妹	鳥海山(鳥見山)
北	佐渡・新潟県	度津(ワタツ)神社	ワタツミ(海神)	本来の御神体「海」
	佐渡市羽茂	五十猛命・大屋津姫	ニギハヤヒの兄・姉	羽茂川・妹背山神域
陸	越後・新潟県	彌彦神社	ニギハヤヒ・天道日女命	神の山彌彦(伊夜比
	西蒲原郡弥彦村	天香山命(高倉下命)	の子(尾張・海部氏祖)	古神)山信仰
道	能登・石川県	気多大社	スサノオの女、須世理姫	神奈備「いらずの森」
	羽咋市寺家町	大己貴命(大国主命)	(ニギハヤヒの妹)の婿	中央の巨石
道	加賀・石川県	白山(シラヤマ)比咩神社	しら＝ス羅(新羅)	御神体山
	白山市三宮町	菊理媛	シラヤマヒメ(ククリヒメ)	白山(休火山2702m)
道	越前・福井県	気比神宮(筥飯宮)	潟湖・角鹿津・穴浦	御神山
	敦賀市曙町	伊奢沙別命(御食津大神)	新羅系渡来人・海神	天筒山
道	若狭・福井県	若狭彦神社(遠敷明神)	ワカサ・オニユウ(朝鮮語)	遠敷川の清流
	小浜市龍前	若狭彦神(彦火火出見尊)	創始社・白石神社	鵜の瀬の巨巖
山	丹波・京都府	出雲大神宮(イヅモオカミミヤ 大八洲国 国祖神社)		神体山＝千年山・
	亀岡市千歳町	大国主命・三穗津姫命 元出雲(大社が移転)		御蔭山(御影山)
山	丹後・京都府	(元伊勢)籠神社 (天照国照彦天火明		真奈井ヶ原・磐座
	宮津市大垣	彦火明命(ニギハヤヒ) 櫛甕玉饒速日命)		子種石
陰	但馬・兵庫県	出石(イズシ)神社	秦氏の祖	「禁足地」
	豊岡市出石町	天日槍命・出石八前大神	伊奢沙別命	神苑・出石
道	因幡・鳥取県	宇倍神社	(古)稲羽・稲葉 宇部	本殿上の岡の上
	鳥取市国府町	武内宿禰命	山の双履石・長寿神	石囲いの中・二つの石
道	伯耆・鳥取県	倭文(シトリ)神社	建葉槌(思兼神)織神	御冠山
	東伯郡湯梨浜町	建葉槌命・下照姫命	下照姫(大国主の娘)	(安産岩)
道	出雲・島根県	出雲大社(杵築大社)	素戔鳴と奇稻田の子	(杵築宮は国譲り条件で
	出雲市大社町	大国主大神	とも、6世の孫とも	出雲杵築に建てられた)
道	出雲・島根県	熊野大社	(神祖(カムロギ)、熊野	熊野山の山上岩座
	松江市八雲町	素戔鳴尊	大神 櫛御氣野命)	大社の元宮 御神山
道	石見・島根県	物部神社	ニギハヤヒ・三炊屋姫	神体山八百山に神墓
	太田市川合町	宇摩志麻遲命	(長髓彦の妹)の子	が

自由原稿

貴様と俺とは……

千坂 精一

この春靖國神社に詣でたとき、遊就館の前に『大東亜戦争七十年展』の幟が立っているのを見て今年は先輩たちの七十回忌なのだと気がついた。あのとき私は満十五歳だったのだから七十年経ったことに違いない。

そのことをあらためて感じながら境内の裏手にまわって神池庭園を回遊していたとき、ふと旧海軍では他人からは「貴様」と呼ばれ自身のことは「俺」（上官には「自分」というていたことが思い出された。

それまで友達のあいだでは、相手を「君」自分を「僕」というていたので迷惑った。

「貴」は敬意を表す語であり、「様」は氏名の下に添える敬称のはずである。

だから「お前」ならともかく、先輩や上官から「貴様」と呼ばれるのには面喰らった。

はじめのうちは「貴様」も「俺」も違和感があつて口にするのが躊躇されたが、慣れしてくるとこんどは「君」や「僕」のほうが軟弱で気恥ずかしく思うようになってきた。

この「貴様と俺」という呼び交わしは出撃にあたりたがいには支え合う絆にもなった。

これが飛行兵仲間になると二人のあいだはもつと緊密になってくる。

戦闘機の零式は単座で一人乗りだが、爆撃機の九九式、彗星は複座で二人乗り、銀河は三人乗りである。

この操縦員と偵察員の組み合わせをペアとあった。三人乗りの銀河の場合は操縦員、偵察員、電信員である。

余談だが銀河は双発機だったからプロペラは両翼にあるので機体先端部分は風防で囲まれていてそこに偵察員が坐る。経験はないが天地が一望できるのは落着かずあまり気持のよいものではないという。

いちどペアを組むと負傷か戦死しない限りどこまでも道連れであるから絆は固く、同期とか仲間を超越した一心同体の関係になる。

昭和十九年十月のフィリピン戦のあと、翌二十年二月に南九州に点在していた各航空隊を纏めて空母はすでに全滅していたのに組織名だけが残っている航空艦隊が結成されたとき、新司令長官に就任した宇垣纏中将は、「麾下全航空隊は特別攻撃戦法に徹する」ことを指令した。体当たり戦法である。

特攻を命ぜられた彗星の攻撃隊では、「体当たりするだけなら操縦員だけでいい。偵察員は無駄死にさせずおろしましょう」

部下を思い遣る飛行隊長から司令にそういう合理的な意見が具申された。

その噂をききつけた偵察員たちは結束して司令室に押しかけ、偵察員がいなくては目的地まで飛べぬ道理を力説して隊長の具申を受け付けぬよう詰め寄り、承知させたという。

これまで生死をともししてきたペアは肉親以上に太い絆で結ばれていたもので、一人旅立たせて自分だけ生き残るのを潔しとしなかったのである。

そして出撃命令が出るとペアで愛機に乗り込み、みんな逝ってしまった。

八月十五日に天皇の『終戦詔勅』が放送された日の夕刻、宇垣長官直率の彗星十一機が大分基地から沖縄に出撃するとき、長官は中津留隊長機の偵察席に搭乗するためペアの遠藤飛曹長に交代を命じたが、遠藤は服さず強引に長官の股間に潜り込んで逝ったという。

練習生教程を卒えて実戦部隊へ配属されたばかりのまだペアを組めない技術未熟のスペアは、先輩たちの出撃を見送るだけで戦争が終わり、ついに生き残ってしまった。

自由原稿

蟻通神社とは

柴田弘武

大阪府泉佐野市長滝に蟻通ありとおしという珍しい名の神社がある。この神社について、『枕草子』第二四四段に、「昔、ある帝が在位であつたが、もつぱら若い人だけをお愛しになり、四十歳になつた人をお殺しになつたので、初老に達した人は地方の遠い国に逃げ隠れたりしてただの一人も都の中には老人が見あたらなかった。当時中将だつた方ですばらしく評判が良く思慮分別などもしっかりした方がいた。七十に手の届く両親をもつていたが、（…中将は孝心深い人だったので、こつそりと屋敷の中に地下室を設け、そこに両親を隠して世話をしていた。）

ところが、支那もろこしの皇帝がわが国の帝をどうかしてあざむいて、この国を征服しようと、しよつちゅう小手調べをし、論争をしかけに使いをよこす。（…削つた棒の根元と先端を見分けろ、寸分違わぬ蛇の雄雌を見分けろ、

という二件の難題を中将が親に知らせると親が難題を解いてくれ、中将は面目をたもつ）。

それからしばらくあいだをおいて、七曲りに入り組んだごく小さな玉の中に穴が通じていて、左右に口が開いているのを献上して、『この玉に緒を通していただきたい』（…言つてきたが殿上人たちは、とても無理だという）。中将はまた親のもとに行つて、『こうです。』と話すと、親は『大きな蟻を二匹ほどつかまえて、腰に細い糸を結びつけ、その糸にもう少し太い糸をつないで、むこう側の口に蜂蜜をぬつてみなさい。』といったので、中将はそのとおり帝に申し上げて蟻をこちら口から入れたところ、蟻は蜜の匂いをかいで、予期のとおりたちまちむこう側の口から抜け出て来た。そこで、その糸の通された玉を持たせて帰したところ、それに対して『やはり日本の国はたいしたものだ。』と感心して、以後はそのような難題をもちかけなくなつたということだ。

帝はこの中将をたいした賢人だと思ひ召されて、中将に『どんな恩賞をしたらよいか。どんな官位を望むか。』と仰せになつたところ、中将は『毛頭、官職も位階もいたどころとは存じません。ただ年を取つた両親が行方不明になっておりますのを探して都に住まわせることをお許し願います。』と申し上げたので帝は『なんでもないことだ。』と仰せられてお許しになつたので、すべての親たちがこのことを聞いて大喜びしたことだった。中将はその後、上達部から大臣にまで任ぜられて栄達したという。

そういう次第で、その中将だった人が神になつたのだろうか。その神の御前に参詣した人の枕もとにある晩この神が仰せになるには七曲わだにまがれる玉の緒をぬきてありとほしとは知らずやあるらむと、歌をお詠みになつたということだ。（現代語訳は塩田良平による）と記されている。（なおこの話は吉田東伍によると伝典に由来するという。）

もつともこの話は、『角川地名大辞典』によれば、「天慶九年（九四六）に紀貫之が当社前を下馬せずに通過したために当社の崇りのため馬が動かなくなり、『かき曇りあやめもしらぬ大空にありとほしをは思ふへしやは』という歌を奉つてその崇りを鎮めたとい

う説話があり、現在では、紀貫之が蟻通の地名にちなんで詠歌したものを、後に清少納言がさらに架構して『枕草紙』にあるような俗説にしたものと考えられている。」とされる。

それはともかくなぜこのような名称の神社がここにあるのであろうか。

ところで若尾五雄著『金属・鬼・人柱その他』によれば、蟻通神社はこのほかにも奈良県吉野郡東吉野村小の丹生川上神社中社、同県桜井市の穴師兵主神社、和歌山県伊都郡かつらぎ町上天野の丹生都比売神社、同町渋田の蟻通神社、同県田辺市湊蟻通神社がある指摘している。さらに私の調べでは高知県吾川郡別枝道芝の杉本神社にも合祀されている。

若尾氏は蟻通神社が丹生川上神社やかつらぎ町の丹生神社の異名となっていることから、これが水銀採取と関係あるうかとし、丹生川上中社の蟻通橋を渡れば三尾銅山がある。又渋田の蟻通神社の古宮には銅の廃坑跡があり、田辺市湊については「あの辺り一帯は湯の華がいっぱい咲いているところで、硫黄分がたくさんあり、金、銀、銅も量の多寡

は別として出ます」という地元の湯川幸宏氏の説を紹介している。そして件の泉佐野市の元宮（現在地の北西約一キロ）のあった場所には丹生池があり、その池をはさんで天野神社もあると指摘し、「ともかく『蟻通』は丹生とともに鉾山に関係がありそうだ」と結んでいる。

また高知県の道芝の蟻通宮については『仁淀村誌』の杉本神社の項に、「ここには蟻通宮という奇異な神社が往古からあったもので、明治初年に杉本神社へ合祭されていたが、境内には明治四十三年海津見神社へ合祭されるまで、小さな宮があつて、宮には頭と腹が黒く、胴の赤い長さ約一センチの蟻が沢住み家にしていて、そのことから蟻通宮といっていたものといわれ、その後は姿を消して、今は一匹も見つけることができず、祭神もつまびらかにすることができない。」と書かれている。

実際に蟻がいたかどうかはともかく、ここでも含銅硫化鉄鉾を採掘していた長者鉾山が昭和三八年まで稼行していた（『仁淀村誌』。『日本地方鉾床誌』にも、別枝地区の沢渡・岩屋・芋生野にはマンガン鉾山がドッ

トされている。またここにはカラストヤシキという地名があつて、昔安徳天皇に供奉してきた鳥出生丹という人が開いたという伝説がある。この生丹という名も「丹生」を思わせる。この地の蟻通宮も鉾産と関係があつたことは間違いないだろう。

そうすると鉾山と蟻通がなぜ結びつくのかが問われてくる。私はこの謎を見事に解いたのが故小牧進三氏の「金工史の視点から―古代丹後の伝承地名を歩く―」（季刊『郷土と美術』一九八八年一月冬季号所載）であると思う。詳細は拙著『全国「別所」地名事典』下の京都府与謝郡加悦町滝「別ソウロ・上ベツソウ」の項で紹介したが、それを要約してみよう。

氏はまず『丹波国風土記残欠』の加佐郡有道郷（本字蟻道）条を紹介する。そこには「昔天火明命が飢えてこの地に来たとき、蟻に導かれて穴巢国に到り、その土地に饗を奉られた。天火明命はそのことを喜ばれ、土神に『蟻道彦大食持命』の名を賜った。そこでこの地を蟻道という。また神祠があつて、蟻巢という。今阿良須というのは訛であ

る。」と書かれている。有道郷は現在の福知山市大江町有路のこととされる。

大江町は酒呑童子の鬼退治説話で知られる町であるが、その鬼伝説が暗示するように大鉱山地帯である。

氏はまず『日本民俗文化大系』の「伊勢の丹生の地に点在する中世の朱砂採掘坑道をみると、径六〇〜七〇センチ大の大人、一人がやつと腹ばいでもぐり込める程度のヨコ穴坑で鉱脈を追うため、約二メートル毎に坑道は屈折し、坑道入口はまるで蟻穴に見えるという」という記述に注目する。私も奈良県宇陀の地域でそのような穴を見たことがある。地元の田中八郎氏から、それが朱砂の採掘坑跡だと教えられた。

小牧氏は「小さな坑道から地表に朱砂を搬出するため坑道を出入りし働く坑夫（鉱夫）の姿が、あたかも、地をほう蟻が餌を求めて蟻穴を出入りする姿にあまりにも酷似していたため、征服者からみて彼らは蟻にたとえられ『蟻』とよばれたにきつとちがいない。」と述べている。

またアメノホアカリの火中出生譚を紹介した上で、同神は産鉄神であったとし、その神

が「空腹のまま蟻道で、蟻（坑夫）に案内され、穴巣国にたどりついた風土記の語りは、この蟻道の地にすでに先住していた坑夫（鉱夫）に案内され、いくつか開かれている坑道現場に着いたことを表現し、その現場が穴巣国であったとみたい。したがって種々の食持でもてなした食物も、日頃人間が食する五穀を言っているのではなく、鉄をはじめ、豊富でさまざまな鉱物資源が探査されえたことを食物にたとえている」とする。

なお大江町には血原の地名もあり、それは大江町尾藤、尾藤奥から採取した朱砂の堆積地とも考えられるという。

以上の指摘は「蟻道」の解明ばかりではなく、蟻通神社にも全くあてはまるのではないかと思えるのである。

三戸岡さんが、山谷えり子氏と対談

三戸岡さんが、参議院議員で国家公安委員会委員長、内閣府特命担当大臣(防災担当)の山谷えり子氏と雑誌『致知』十一月号で「道德教育のススメ」と題して対談を行っています、中見出しを拾って紹介します。

◇ いま道德を求める空気が醸成されてきている

◇ 現場での道德教育の実態

◇ 教育改革への布石は打たれていた

◇ 大人にも道德教育が必要だ

◇ 生徒たちは「積小為大」に感動する

◇ グローバリゼーションの中で

◇ アイデンティティを守る

◇ 悪に打ち克つ強い善が必要である

◇ 母性が一番の情緒教育である

◇ ガキ大将が改心したきっかけ

◇ いま教育問題の一番の課題とは？

◇ 日本人の魂の原点

自由原稿

マリアに抱かれた

可愛くないキリスト像

新井 宏

私にとって、小さい頃キリスト教の幼稚園に通っていたことと、誕生日がクリスマスイブであることが、キリスト教との縁の全てである。しかし、それでも幼時のキリスト教の記憶がわずかに残っている。そのひとつが、東方の三博士が、星に導かれて、ベツレヘムに至り、馬小屋でマリアに抱かれた神の子イエスに拝する話である。

おそらく幼稚園の頃、クリスマス会で聞いた話であろうが、不思議なことに、その時にマリアに抱かれたキリスト像を見たような気がする。しかもそのキリスト像は、あまり可愛くなかった。変なことを覚えているものである。

あるいは後年の記憶が入りまじっているのかもしれないが、最近になって、ルネッサンス期の聖母子像の絵画をいくつか見ても、いつも同じ印象を持つ。私の基準では、幼児は無条件に可愛くなければならぬのに、マリアに抱かれたキリスト像は可愛くないのである。

もちろん、可愛くないというのは言い過ぎで、賢い顔、聡明な顔とでも言えばよいのかも知れないが、幼児なのに大人の顔付きをしている違和感なのである。

キリストを崇める立場からは、単に可愛いキリスト像を描くわけには行かなかったのだと思うが、そんな理由なら、いくらでも解説があるはずである。

しかし、どうしたことであろうか、それらしい解説がなかなか見つからない。いや、それどころか、マリアに抱かれたキリストが「可愛くない」などと不遜なことを言っている人もいないようなのである。

そうになると、私の認識が間違っているのか不安になる。

そこで、ルネッサンス期などの有名な聖母子像のキリスト像の部分を、インターネットから任意にコピーして別表にして見た。ただし、インターネット上の聖母子像では、キリスト像部分のみを拡大するとかなり不鮮明になるので、除外したものもある。

有名な画家としては、十四世紀初のジョット、十五世紀のマザッチョ、フィリップ・リッピ、ロヒール・ファン・デル・ウエイデン、ボッテチェリ、ラファエロなどを含んでいる。

ほぼ、年代順に一覧表として並べてみると、おそらく私の見解に同意して頂けるであろう。もちろん、愛らしい天使のようなキリスト像も無いわけではないが、大部分が「可愛らしくない」のである。

そこで、勝手な推測をする。キリスト教など一神教は、どちらかと云えば、性善説よりも性悪説に立脚している。幼児のあどけない「可愛らしさ」を認めていては、性悪説にじまない。でも、正直に言つて、聖徳太子の幼児像もお地蔵さんで「可愛らしい」とは言いがたい。

そう云えば、母がいつも言っていた。

「宏が生まれた時に、ママママしい子だと言われたが、誰も可愛いと言ってくれなかった」と。おびんずる様のようなとも言われたらしい。母にとってはかなりのショックだったようである。

だから、散歩中などで、幼児連れの母親に会うと、「可愛いですね」と声をかけることにしている。もつとも、例外なく本当にみんな可愛いからであるが。



Duccio



Giotto



Giotto



Cimabue



Nerio



Lorenzetti



Daddi



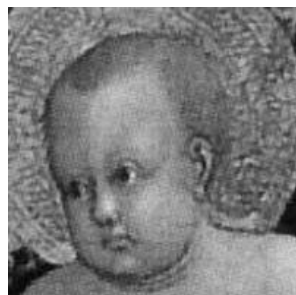
Gerini



Massacio



Francesca



Sassetta



Mantegna



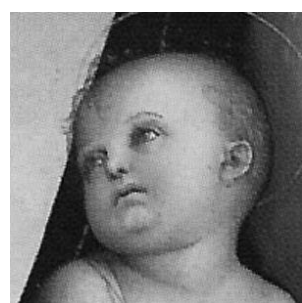
Filippo Lippi



Weyden



Botticelli



Purugino



Mantegna



Durer



Raffaello



da Vinci

自由原稿

出雲大社再考 (五)

国造家の慶事と皇室の存続の危機

村上 邦治

出雲大社宮司千家尊祐長男国麿禰宜と高円

宮家次女典子女王は、納采（結納）、告期

（結婚式日伝達）、賢所皇霊殿神殿（宮中三

殿）拝礼、朝見（両陛下へのお礼）、入第

（式当日実家へ迎え）の各儀式を経て、十月

五日に出雲大社で、結婚式を挙げられた。五

月の内定記者会見から、挙式に至る諸儀式

は、久しぶりに、皇室の伝統を思い呼び起さ

せた。結婚により、典子女王は、皇籍離脱

し、皇族は二〇名に減少、この慶事は、改め

て、皇室が抱える深刻な現状を、認識させる

ことにもなった。

最古の万世一系を続ける両家の結婚は、初

めてである。皇室は、天照大神を皇祖神と

し、第一子天忍穗耳尊の子、瓊瓊杵尊に連な

り、現天皇は第一二五代にあたる。一方、天

照大神の第二子天穗日命を祖とする現千家国

造は、第八四代にあたる。両家とも、これま

で男系男子の継承が続けるとされるが、継承体制には、大きな相違がみられる。

現皇室は、昭和天皇家と、その弟である三

笠宮家で構成されている。三笠宮系三家は、

既に当主は不在で、内桂宮家は、今年六月廃

絶された。残る二家に、皇位継承者は皆無

で、二家の女性四人は、結婚すると、皇籍を

離れる。

天皇家では、二人の男子（皇太子と秋篠

宮）に恵まれたものの、その後を継ぐ皇位継

承者は、ただ一人（悠仁殿下）である。天皇

の弟常陸宮には、後継者は不在である。こう

した現状から、二、三十年先を展望すると、

皇族は、十名弱のきわめて小世帯になること

が予見され、皇族による公務は大幅に制限さ

れよう。さらに、最大の問題は、次々皇位継

承者は、僅か一人であり、まさに、皇室は

「存続の危機」に陥っているといっても、過

言ではない。

一部に、危機の原因は、終戦後宮家皇族の

臣籍降下にあるとし、危機打開の方策とし

て、皇室典範改正により、降下した方の復籍

を認めよと主張する。又、西欧諸国と同様、

女系天皇容認論者も増えている。

しかし現在の皇室危機は、長きにわたる皇位継承体制自体に、問題の根源があるように思われる。

天皇は、皇統に属する男系の男子が継承す

る。そのため、皇后に継承者が誕生しない場

合に備えて、側室制度が設けられ、庶子によ

る皇位継承が、繰り返された。江戸期以降を

みても、皇后による男子誕生は、一度もな

い。それどころか、皇后の実子は、唯一第百

八代後水尾天皇の皇后和子（二代将軍秀忠の

娘）の長女、第百九代明正天皇（女帝）のみ

であった。側室に幾人かの男子が誕生して

も、皇位継承者が決まれば、その他の庶子は

出家させられ、皇族に留まることはなかつ

た。

皇位継承者は、天皇から最も近い嫡子が選

ばれるが、長らく嫡子に恵まれなかったの

で、庶子による皇位継承が一般化したのであ

る。江戸末期以降の、孝明、明治、大正の三

天皇も、その例外ではない。

こうした継承体制を変えたのが、生まれな

がらに病弱であった大正天皇である。皇后か

ら四人の男子（昭和天皇、秩父宮、高松宮、

三笠宮）が誕生したのは、まさに奇跡であつ

た。これにより、前近代的な側室制度は廃止とされた。そして、弟三人は、新たに宮家を設立し独立、今日に至るのである。

しかし、長い歴史からみると、嫡子男子四人は、例外であった。新三宮を創設することで、皇位継承者と皇族数の確保は盤石とされ、新典範では養子制度は廃止された。しかしその後、男子の嫡子に恵まれなかったことから、存続の危機に至ったのである。

一方、出雲国造家の後継者体制の特徴は、国造家一族で形成された上官体制にあった。上官家は、十数家あり、国造家に後継者が無き場合は、養子や婚姻などにより、男系男子を擁立したのである。

例えば、江戸初期、北島方の上官佐草自清は、六四代千家慶勝の孫であったが、佐草家に男子がおらず、婿養子となり、佐草家を継いだ。その嫡子は佐草家を継ぎ、二男は上官千家の養子となり、七一代千家国造宗敏となった。北島国造家においても、一九世紀初めの七四代から、上官家（本屋敷）に移り、今日に至っている。北島・千家両家は、大社祭祀権をめぐり、明治五年まで、鋭く対立した

が、上官家の存在により、両家とも、男系相続は、安定して継続することが出来たのである。

佐草自清が書き残した『出雲水青随筆』に、社家員数として両国造、上官社職一七人、権社家八人、中官社人六人、伶人十人、子良（こら）二四人、神人六〇人、被官一三〇人とある。約二五〇人で大社祭祀を守り続けたのである。

本書によると、当時大社年中行事は七七にのぼった。最も多い月は、一月で、二四あり、多い日は四神事が行われた。年間の最大神事は、十月一日から一七日までの神在祭とされ、全国の神様が出雲に集まる神事で、七日間続くものであった。

各神事についても、詳細に記述している。膳の配置や器の盛り付けなど、図式化して、分かりやすい。例えば、元日の神事をみると、膳の数、神饌の種類、御飯（飯、餅、精米）、野菜（大根）、海菜（和布又は昆布）、御贄（鯛又は小鯛）など、古くからのしきたりが、細かく定められていた。

祭祀執行についても、国造の外、上官やその他社人数、その装束、祭式の手順、舞があ

る時は、音曲、楽器も決められていた。多くある神事は、全て異なり、古来より継承し熟知した上官家は、祭祀執行には、不可欠な存在で、国造と一体になって、奉仕を続けてきたのである。

大国主神を祀る出雲大社の、多種で複雑な祭祀には、古来より厳格に伝えてきた上官家を必要とし、この上官家群の存在こそが、国造家の男子一系を安定させた最大の要因であった。

皇位継承者を絞ってきた継承体制と、国造家の集団継承体制の違いが、今日の両家の現状を、如実に物語っている。

参考文献

『近世出雲大社の基礎的研究』（西岡和彦）
『神道大系 神社編 出雲大社』

十一月討論会について

テーマ 「日本列島 西・東」

司会 鯨 游海氏

日時 十一月二十六日(水)

午後六時十分～八時

会場 千代田区立日比谷図書文化館

四階セミナールーム

参加者にご発言をお願いしますので
皆様各々ご準備をお願いします。

「私は東と西の違いについて、

〇〇〇〇の体験をしました。

この理由は恐らく△△△△に起因
するものと思われます。」

事柄は大小問わず、何でも結構です。

来年度の講演と

執筆予定

平成二十七年の例会の講演
予定と史遊会通信の執筆予
定を暫定的に下記のように
計画いたしましたので、ご
確認下さい。

月次変更などのご希望があ
りましたら、早めに幹事ま
でお申し出下さい。

お詫びと訂正

十月十日発行の「史遊会通
信」は235号でしたが、
誤って234号と記載して
しまいました。お詫びして
訂正させていただきます

平成27年度 史遊会講演者・「史遊会通信」自由執筆者一覧（敬称略）

講演		「史遊会通信」執筆者					
年月	講演者	No.	発行月	原稿〆切	自由執筆担当者		
1月28日	柴田弘武	238号	1月	12月末	瀧澤	鍋屋	高橋
2月25日	新井 宏	239号	2月	1月末	太田	森下	佐藤
3月25日	太田精一	240号	3月	2月末	村上	漆原	諸橋
4月22日	村上邦治	241号	4月	3月末	平山	鯨	小田
5月27日	中込勝則	242号	5月	4月末	隆	中込	三戸岡
6月24日	三戸岡道夫	243号	6月	5月末	千坂	新井	柴田
7月22日	千坂精一	244号	7月	6月末	瀧澤	鍋屋	高橋
(8月休会)	(夏休み)	休刊					
9月未定	漆原直子	245号	9月	8月末	太田	森下	佐藤
10月28日	森下征二	246号	10月	9月末	村上	漆原	諸橋
11月25日	(討論会)	247号	11月	10月末	平山	鯨	小田
12月未定	(忘年会)	248号	12月	11月末	「今年感動した3冊の本」全員		
1月27日	小田紘一郎	249号	1月	12月末	隆	中込	三戸岡

9月は第4水曜日が祭日のため、追って調整します。

- 1、講演者は講演の前月末迄に「要旨(15行程度)」を、当月末迄に「講演録」を編集者まで提出。
- 2、友の会会員の自由執筆投稿を歓迎します。
- 3、自由執筆原稿は1頁20字75行を目処に、1～3頁ですが、基本的には自由です。